あわい色彩

かめのあゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あわい色彩

【Nコード】

N05090

【作者名】

かめのあゆみ

【あらすじ】

忘れられない人、忘れたくない人、忘れなくちゃいけない人がいる。ただひとり进行を想い続ける女性、七瀬 凜。そんな彼女のアパートの隣人、冴樹 理久。隣人で同い年。助け合いの精神で、ご飯は毎日当番制。過去から抜け出せない彼女と、過去を知らない彼女。彼女は彼の日々を通し、いつか何を想うのだろうか。友情と恋愛とむかしと今が交錯する、せつないラブストーリー。「欲しいのは、たったひとつだけ。それが手に出来るなら、わたしはどんな代償だって払える」

それぞれの朝（前書き）

忘れられない人、忘れたくない人、忘れなくちゃいけない人がいる。ただひとり进行想い続ける女性、七瀬 凜。そんな彼女のアパートの隣人、冴樹 理久。ふたりは仲良しご近所さん。助け合いの精神で、ご飯は毎日当番制。そんなこんなで和気あいあいと過ごしていると彼はだんだん彼女が気になり始めて、でも彼女は別のだれかを見ていて。友情と恋愛とむかしと今が交錯する、せつないラブストーリー。「欲しいのは、たったひとつだけ。それを手に入れることができるなら、わたしはどんな代償だって払える」

それぞれの朝

(Side RIN)

気がつけば、朝。

京都に引越してきて三年目。

環境の変化は、思ったよりも気にするようなものではなかった。なにかが変わるかもしれないと思ったのは来るまえ、来たあとはそんなことを思ったことすら忘れている。

締め切った部屋のなか。

白くにごった空気は、寝るまえのものとたいして変わってはいなかった。

あまり、寝ていないのかもしれない。

充滿しているヤニ臭さに顔をしかめ、枕もとの携帯電話で時間を確認する。

朝の六時。いつもよりもだいぶはやい起床だ。

すこしだけ重たく感じるまぶたをこすって、私は煙草に火をつけた。

立ちあがり、ベランダの窓をあける。

にごった空気を一掃するようにきもちのいい風がそよそよと舞い

込んできた。

朝日はまぶしく、それはねばけた意識を覚醒させるのにどんなものより役立つ。

目をほそめて、ベランダにぽつんと置かれた鉢植えをみる。

瑞々しいみどりの葉を風に揺らし、アイビーは気持ちよさそうに朝の光を浴びていた。

「おはよう、ジョージ」

答えるように静かに葉を揺らすアイビー。

いつもと同じ、変わらない朝。

いつも違う、空を流れる雲。

雲はどこへ向かうのか。

私はどこへいくのか。

それは私にもわからなかった。

(Side RIKU)

大学も三年目となると、いいかげん下宿生活とは縁を切りたくな

る。

二年の内にバイトを掛け持ちしてこつこつ稼いだお金は、すべて賃貸の維持費に回した。

三階建て、部屋数は各階五部屋ずつ、全部で十五。そこそこの広さしかないが、新築なのが惹かれた。

三階の端から二番目の部屋。景色は、たぶん、いい方だ。

「今日はバイトがあるから、飲み会はやめとくよ。予定が合えば、つぎは行くから」

所属する文芸サークルは、もはや飲み会サークルと言ってもいい。毎日のようにかかってくる電話は、恒例のお誘いだった。女の子の執拗な誘いを右から左へ聞き流しながら、手に持っていたペットボトルのミネラルウォーターを煽った。

きのうのお酒がまだ残っているのかもしれない。むかつきはしないけれど、かすかに違和感を覚えた。

一昨日も飲んで、また昨日も飲んだ。

そのうえ今日も飲んだら、さすがに体調を崩してしまう。簡単にはひいてくれないだろうお誘いに、ありもしない予定をつくりあげて丁重に断る。

俺がバイト生活を送っているのは電話の相手も知っている。バイトを盾にすれば、ひいてくれるのはわかりきったことだった。

「ああ、悪い。俺の分もたのしんでよ」

残念そうな声が、耳もとで聞こえてくる。

「二三会話をかわしたあと、名残惜しそうな声を最後に電話を切った。」

「文芸サークルが聞いて呆れる」

枕元の目覚まし時計を見れば、時刻は朝の七時。

時計にセットしていた時刻よりも一時間早い起床だ。

とんだモーニングコールだと、腹いせに電話を睨んでも返ってくる反応などあるわけもなく。

誰にも向けられない苛立ちを溜息を吐いてやり過ごす。

飲むのは好きだが、身体的にも金銭的にも限度はある。

これ以上飲み会にでたら、そのうち苦勞して貯めた二年分の生活費に手を出すことになりかねない。

「バイト……………増やした方がいいのかなあ」

ぼつりとこぼした呟きは、誰の耳に止まることなく静寂のなかに消えていった。

それぞれの朝（後書き）

初投稿作品です。

どきどきです。

すこしでも、お目に留まることができたらなら、めっけもんです。
読んでいただき、ありがとうございました。

ねむるまちに独り

(Side RIN)

ゆらり、ゆらりと紫煙をくゆらす。

窓辺に佇んで、何をしてもなくぼんやりと外を眺めると、視界にはここ数年眺め続けている住宅街が映る。

ありふれた、どこにでもあるような町並み。
けれど、ここにしかない、この町の姿。

所狭しと並ぶ家々は音もなく鎮座して、その内で眠る住人を静かに見守っている。

早朝の町は音もなく、人の気配も感じさせない。
昼間の喧騒が嘘のように、町はひっそりと静まり返っている。

人が眠るだけでこつも変わるのかと、ひとり思う。

「ふうー……………」

長くゆるく煙を吐き出す。

その呼気の音がやけに大きく響いた。

「……………静かすぎでしょ。逆にうるさいわ」

思わずひとりつぶやく。

つぶやいて、ふと思った。

呼気ですら響くなら、自分の声はどこまで響くのだろう。

「叫んだら、どこまで届くのかしら」

ぼんやりとそんなことを思って、煙越しに空を見た。

うつすらと雲のかかった空は、決して清々しいものではなかった。

「あなたまで届くのなら、恥をしのんで叫んでもいいけどね」

ぼつりとこぼして、すぐさまその言葉に苦笑する。

「あなたの望むところではないわね」

届いたとて、それを確認する術がないのなら。

届いたとて、返ってくるものがないのなら。

届こうが届かながるうが、大差ない。

「見えないものなど欲しくない。

私はいつだって、確かなものが欲しいのだ。

あの人だって、そうだったはずだ。

空を見ていた視線が落ちて、視界には無機質なベランダの床が映った。

味気のないコンクリートの床、ゆっくりと視線をめぐらせれば、

“それ”は置かれている。

瑞々しいみどりの葉を風に揺らし、気持ち良さそうに朝日を浴びる。

私のアイビー。

「キミもそう思っでしょ、ジョージ。」

叫んだとて、届いたとて、どっしりまじりもないのだ。

めいっばい叫んだなら、その叫びはどこまで響くんだろう。

わたしの叫びは、どこまで届くんだろう。

それを聞いて、あなたは何をおもうんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0509o/>

あわい色彩

2010年10月10日10時54分発行